

教材開発例2 「夢とロマンを追い求めて―彫刻家 圓鰐勝三―」

えんつぱかつそう



〔中学校 主題：理想の実現 内容項目：1の(4)〕

起承転結ではない
構成の工夫

〈素材―圓鰐勝三さん―について〉

- 尾道市御調町出身で日本彫刻界の巨匠である。文化功労者として列せられ、文化勲章を受章している。また、広島県名誉県民である。
- 県内及び全国の公共施設等に数多くの作品が展示、設置されている。
- 出身地に、その功績をたたえ、多くの作品を展示した記念館が設立されている。

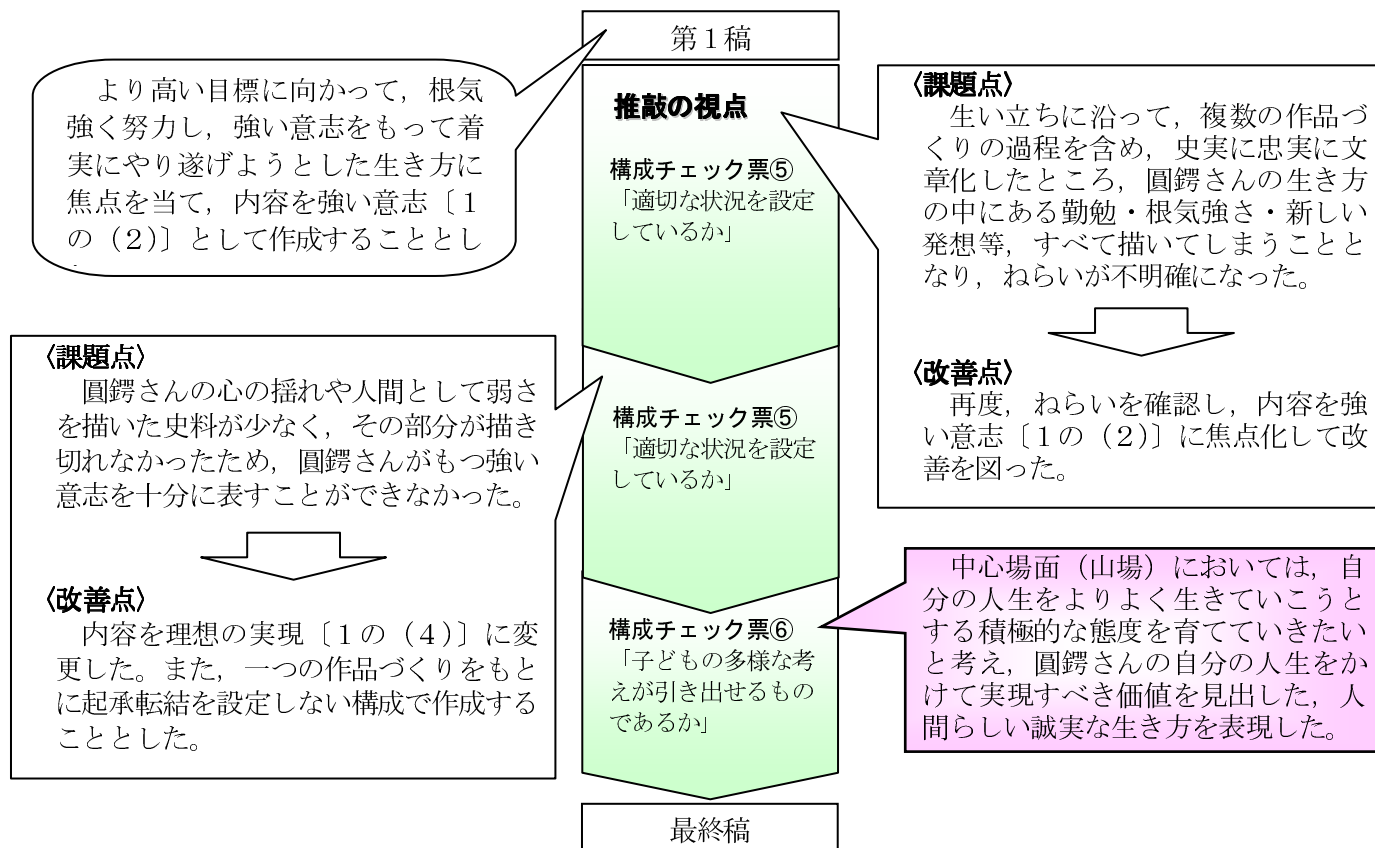
明治38年	御調郡河内村（現尾道市御調町）で誕生
大正10年	京都の彫刻師石割秀光氏の内弟子入り
昭和14年	第3回文展に「初夏」を出品し、特選
昭和50年	広島中央公園に「花の精」（大理石）を制作
昭和53年	東京池上本門寺に「仁王像一対（木彫）」を制作
昭和57年	文化功労者に選出
昭和63年	文化勲章の受章
平成元年	広島県名誉県民に選出
平成5年	伊勢神宮に「神馬」（木彫）を制作・奉納 圓鰐記念館開館
平成15年	享年98歳で没

圓鰐勝三さんの経歴

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：生きることの勇気や意味の深さについて考えを深めることができますか。	A 1：圓鰐さんの生き方から、根気強さ、新しい発想や平和の希求、謙虚さなど人が生きる上で大切にしたいことを学ぶことができます。
Q 2：地域社会の発展への貢献等身近な人物の魅力が表れているものですか。	A 2：数多くの作品が県内の公共施設等に設置されています。また、出身地には、功績を称えた記念館も設立されています。
Q 3：史実考証のために、どのように史料収集を行いましたか。	A 3：圓鰐記念館へ訪問して聞き取りを行ったり、郷土資料（町史等）から情報を収集したりしました。

〈資料「夢やロマンを追い求めて―彫刻家 圓鰐勝三―」の作成〉



夢とロマンを追い求めて ～ 彫刻家 圓鰐^{えんつばかつぞう}勝三 ～

「きみが次に、何をイメージするのが、楽しみだ。」

これは、圓鰐さんが友人の彫刻家や圓鰐さんの作品を見た人から言われた言葉です。

当時の多くの彫刻家たちが、それぞれに専門の素材を決めていて、専門の素材以外で作品づくりをすると言われていた時代にあって、圓鰐さんは主流とする木彫り以外にも、ブロンズ、セメント、金属、陶器など、様々な素材で作品をつくっていきました。そんな作品づくりを続ける圓鰐さんに対して、まわりの人たちからは、非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし、圓鰐さんはそうした非難にも負けずに、作品づくりに対しては「自分なりのものをつくりたい」というこだわりと信念をもって追求し続けました。

広島中央公園に、平和を願って作られた作品「花の精」があります。この彫刻は、初めはセメント彫刻の予定でしたが、欧州に旅行した依頼者の願いを受けて、大理石でつくられることになりました。

イタリアから取り寄せた大理石は、もとの重さ12トン、彫り上げたものでも7トン半あります。ヘルメットをかぶり、ドリルを持って彫っていく作業は、まるで道路工事のようでした。また、これまで手がけてきた作品の多くは木彫りの作品で、素材として大理石を使った経験は少なかったので、「石の目」⁽¹⁾もよくはわからず、普段とは勝手の違う作業の連続でした。そうした中でも、いつもと違う感触を楽しみながら、幾度も幾度も手でなでてみたり、さすってみたりしながら創作を続ける圓鰐さんの姿がありました。原型だけをつくって



「花の精」

おいて、あとは職人に任せることもできるのに、原型づくりから何トンもある大理石を削って仕上げるところまで、全て自分でつくりあげました。そして、出来上がった作品を設置するときも立ち会って最後の最後まで見届けました。

70歳を越えた頃、圓鰐さんは多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となりました。圓鰐さんは、学生たちがそれぞれ自分の思いを作品にぶつけ、粗削り^{あらけず}ながらもその情熱が、かもし出されている作品を見て感心していたそうです。そして、16歳で京都の彫刻師⁽²⁾の元に弟子入りし、基本技術

のマスターから始め、何年もかけて徐々に創作作品に取り組んでいった自分を思い起こしながら圓鏝さんはこう語っています。

「『芸術』の道は遠いし、広く、無限である。キャリアがあるから芸術性の高い作品が作れるかと言えば、そうではないのだ。ここが芸術の面白いところでもある。」

平成5年には、出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鏝記念館が建てられました。内弟子時代、わずかにもらう小遣いで見に行った帝展⁽³⁾や院展⁽⁴⁾の立体彫刻の作品を前に、自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鏝さんの意思を継ぐように、今も多くの人が訪れています。

【注】

- (1) 石の節理（岩石中に見られる規則正しい割れ目）の方向のこと。
- (2) 建築彫刻や仏像などを手がける彫り師のこと。石割秀光氏のもとで修業した。
- (3) 帝国美術院展覧会の略。現在の日本美術展覧会（日展）。
- (4) 日本美術院展覧会の略。

【参考文献】

- 圓鏝勝三（1988）「わが人生」 御調文学 No. 22
- 圓鏝勝三（1989）「わが人生」 御調文学 No. 23
- 祖田浩一（1991）「県名誉県民小伝集 圓鏝勝三」 中国新聞社